慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カール=ハインツ・ライディヒカイト著 ドイツ労働運動におけるウィルヘルム・リープクネヒトとアウグスト・ベーベル
Sub Title	Karl-Heinz Leidigkeit ; Wilhelm Liebknecht und August Bebel in der deutschen Arbeiterbewegung, 1862-1869
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.11 (1959. 11) ,p.985(51)- 989(55)
JaLC DOI	10.14991/001.19591101-0051
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19591101-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

的戦術と改良的戦術の、二律背反という仮定、改良主義が問題となる時きまって用いられてきたこの仮定そのものを問題にすることなく、暗もくのうちにこれをみとめ、自明のこととした事と結びついている。

Berlau の場合について、一つだけふれると、かれは第一次大戦を契機とする社会民主党の国家主義的傾向の中に、一八七五年に党が合流して結党されたさいの、一つの潮流たるラッサール主義の復活をみ、これを強調している。しかし一八六四年に死んだラッサールの時代の国家と、独占資本の段階に入り、帝国主義戦争の立役者として登場した時の国家とは、その基礎となっている社会経済構造も、それを支持する社会層も全く異なっている。それを同じ目で、ラッサール主義の復活としてみたのでは問題は解明されない。むしろ、こうした国家主義の再興を変化した政治・社会・経済構造の基礎のうえにとらえることによって、当時の社会民主党の変質が内容的に明らかにされるであろう。

社会運動は政治と経済の結節点である。政治と経済の規定関係、相互関係を検証してゆく好個の分野である。このことの複雑さ、困難さは大きいとしても、こうした認識のうえに、あらためて方法論を再検討する必要があろう。

（注一一） Schorske, ibid., pp. 13-14.

書評及び紹介

カール＝ハインツ・ライディヒカイト著
『ドイツ労働運動におけるウィルヘルム・リープクネヒトとアウグスト・ベーベル』
(Karl-Heinz Leidigkeit; Wilhelm Liebknecht und August Bebel in der deutschen Arbeiterbewegung, 1862-1869, 1957.)

„Mit Preußen gegen Deutschland
oder mit Deutschland gegen Preußen"
—— Wilhelm Liebknecht ——

本書は、ライプツィヒのカール・マルクス大学ドイツ史研究所(Der Institut für deutsche Geschichte an der Karl-Marx-Universität Leipzig) のエルンスト・エンゲルベルク教授(Prof. Dr. Ernst Engelberg) の編集による研究叢書の第三巻にあたるものである。すでに第一巻には、トーマス・ホェーレの伝記的研究、「フランツ・メーリング、そのマルクス主義への途」(Thomas Höhle; Franz Mehring, Sein Weg zum Marxismus, 1869-1891)、第二巻にはハンス・バイエルの「十一月革命からミュンヘンにおけるソヴェート共和国へ」(Hans Beyer; Von der November-revolution zur Räterepublik in München)、第四巻はウォルター・ズィーガーの「ドイツ労働者青年運動の最初の十年」(Walter Sieger; Das erste Jahrzehnt der deutschen Arbeiterjugendbewegung, 1904-1914)、第五巻は第一巻の続きで、ヨーゼフ・シュライフシュタインの「フランツ・メーリング、そのマルクス主義的創造」(Joseph Schleifstein; Franz Mehring, Sein marxistishes Schaffen, 1891-1919) などの五巻が出ており、これらはマルクス主義の方法論の上に立つ独創的なユニークな研究であると同時にドイツ労働運動史研究の最近の成果を示すものとして注目に値しよう。

本書は、著者が「はしがき」においてのべているように、「ウィルヘルム・リープクネヒトとアウグスト・ベーベルが、一八六二年から一八六九年の時期に、ドイツ労働運動が独立の労働者政党への発展において果した影響の探求と記述をもって、ドイツ労働運動の革命的伝統の描写において、自分にできる限りの寄与をするという課題においてとりかかった」とのべているように、従来まで、比較的、研究の少なかった黎明期のドイツ労働運動と社会主義についての労作である。本書は、つぎのような内容から成っている。

序文、第一章 ドイツ労働者階級の進歩的部分のブルジョアジーからの分離、第二章 全ドイツ労働者協会の方向転換、第三章 労働者教育協会の発展と一八六五年までのアウグスト・ベーベル、第四章 小市民的民主主義と労働者協会、第五章 マルクスおよびエ

書評及び紹介

ンゲルスによって発展せしめられたドイツ労働者政党のための戦略的、戦術的主題、第六章　一八六六年の危機におけるドイツ民主共和国をめぐるリープクネヒトとベーベルの闘い、第七章　リープクネヒトとベーベルによって指導された労働者協会の独立への途、第八章　護民官としてのリープクネヒトとベーベルの活動、第九章　全ドイツ労働総同盟の最善の努力によるシュワイツァの孤立化のための闘い、第十章　一八六九年、アイゼナッハにおける社会民主労働者党の建設、附録である。

すでに目次を一瞥しただけで明らかなように、著者がこの書のなかでとりあつかっている時代、すなわち一八六二年から一八六九年までのドイツの労働運動は、緊急に解決することを迫られている基本的に重要ないくつかの課題に直面していたということができる。それは第一に、ドイツ社会主義および労働運動の内部に根強くその勢力を張っていたラッサール主義の克服、第二にドイツ統一の重大な障害としての反動勢力プロイセン（＝ビスマルク）との闘争、第三に、ドイツの共和主義的統一のためのブルジョア民主主義者（＝小市民的民主主義者）との共同闘争、そして最後に社会主義労働者政党の建設の問題である。著者が正しく指摘しているように、「イギリスの労働運動は、経済的闘争の意義を過大に評価しようとする傾向が支配的であるのに、ドイツの労働運動の場合は、経済闘争を過小評価しようとする危険性があった。というのは、ドイツにおいては、その内部に行なわれるところの統一運動によって、はとんどまったくその力がついやされるからである」（S. 111）。これはまことに先進国イギリスとおくれた資本主義国ドイツにおける労働運動の特徴のちがいを最も明瞭に表現している。

この時代において労働者階級のさしあたっての目標は、封建的絶対主義的な支配権力との容赦のない果敢な闘いが要求されたことである。このような立場から、第一章においては、一八四八年のドイツ三月革命後から一八六〇年代までの労働者階級の成長についてのべられている。一八五九年の秋以来、プロシヤを先導とする国民的統一の機関として、国民協会（National-verein）が、ブルジョアジー、それもとくに小国家からのブルジョア的代表者によって組織されており、かのシュルツェ・デーリッチ（Schulze-Delitzsch）などがその代表的な指導者であった。ブルジョア的な改良主義者の影響のもとに、労働者階級は、数多くの労働者教育協会（Arbeiter-bildungs-verein）を各地に建設し、これを通じて相互連帯の意識にめざめていった。とりわけ工場労働者の階級意識のめざめに脅威を感ずるブルジョア民主主義者と労資の階級対立を隠蔽しようとするシュルツェ・デーリッチ主義者にたいして、ファルタイヒ（Julius Vahlteich）やロスメスラー（Emil Adolf Roßmäßler）等は、従来の相互扶助的階級協調的な労働者協会からぬけでて、一八六二年本質的に労働組合的な協会「前進」（„Vorwärts"）を組織したのであって、これは、ドイツ労働運動の発展におけるひとつの進歩であった（SS. 14-16）。マルクス主義の影響をうけないこの組合は、

革命的でも社会主義的でもなく、老齢年金制、営業の自由、移動の自由などの日常的な問題について要求していた（SS. 16-17）。やがてボナパルティズムの再現としてのビスマルク的生産組合やシュルツェ・デーリッチ式協同組合、ブルジョア政党進歩党などの上からの妥協懐柔政策とこれとの闘いの過程のなかで、フェルディナンド・ラッサール（Ferdinand Lassalle）によって、一八六三年五月「全ドイツ労働者協会」（Der Allgemeine Deutsche Arbeiter-verein）が結成され、ドイツ労働運動は、ここに労働者階級の政党樹立のための最初の一歩をふみ出した。

第二章では、全ドイツ労働者協会に巣喰うラッサール主義（性格として俗物主義・貴族主義、政策的にはビスマルクとの妥協抱合、理論的に混乱していた）の克服のために努力するリープクネヒトについてふれられている。一八六二年三月、ギーセンの官吏の息子に生まれた彼は、ギーセン、ベルリンおよびマーブルクの各大学でそれぞれ言語学、神学および哲学をおさめたが、一八四八年のフランス二月革命およびドイツ三月革命に深く動かされ、ドイツ国憲法闘争にジャーナリストと同時に兵士として闘う過程を通じて、マルクスおよびエンゲルスと相識り、共産主義の洗礼をうけるに至った。（SS. 33-34）。彼の使命はドイツ労働運動に独裁的に君臨するラッサール主義の克服、とくにビスマルク（国王をとりまく絶対主義勢力）との協調のもとにブルジョアジーを打倒しようとする戦術的誤謬の打破、そしてマルクス主義への改宗であったが、ラッサールの死後、後継者シュワイツァ（Johann Baptist Schweitzer）の、ビスマルクへのより一層の接近によって、全ドイツ労働者協会のヘゲモニーをめぐるラッサール主義とリープクネヒトによって代表されるマルクス主義との闘争が激化した。

第三章および第四章においては、一八四〇年、プロイセンの下士官の息子として兵営のなかで生まれたベーベルは、長じて旋盤工となり、南ドイツおよびオーストリアの各地を遍歴して、一八六〇年二一歳で、当時、共和主義的伝統の根強いザクセン州の首都ライプツィヒに至り、この地のブルジョア民主主義運動に参加するうちに、自由主義的な民主主義者から革命的民主主義者に成長し、やがてリープクネヒトを通じてマルクス主義者となった。リープクネヒトとベーベルとは、前者は主としてドイツ統一という国民的課題に、労働者階級の力をいかにして結集するかという問題、後者は、一八六二年以来ザクセンの労働者教育協会の指導者となり、ともに社会主義政党樹立のための準備に専心した。一八六五年、来るべきプロシア・オーストリア戦争の危機を前にして、ドイツ統一への要求は昂まった。従来ドイツ統一をめぐって二つの異なった主張があった。ひとつは、プロシア中心の大ドイツ主義であり、後者はオーストリアを中心とし、プロシアを除外する小ドイツ主義である。一八四八年のドイツ三月革命に敗退を余儀なくされていた南ドイツ諸州の民主主義者の運動は、プロシアを中心とする中央集権的なドイツ統一に強く反対していた。ところがプロシアのブルジョア政党である進

歩党の力が弱いため、ビスマルクの圧力によって国民的な統一運動の先頭に立つことができなかったし、労働者階級もまた革命的な政党を欠いていたために、国民的な統一のための闘いのなかで指導権を掌握することができなかった（SS. 70-71）。リープクネヒトとベーベルにとっては一方においてドイツの国民的統一、他方において労働者階級による革命的政党の結成が焦眉の急務となったのであって、前者は後者の必須の前提であった。労働者階級は絶対主義勢力を打倒し、国民的統一を実現するために、小ブルジョア民主主義者（Kleinbürgerlicher Demokrat）との統一戦線の結成、革命的労働者政党の結成のためのラッサール主義とのたたかいを同時におしすすめながら、しかも小ブルジョア民主主義者との共同闘争の限界を明確に把握しなければならなかった。こうした困難な問題の解決のために、マルクス主義がドイツ労働者階級に浸透する必然性があった。

第五章および第六章においては、英国におけるマルクスおよびエンゲルスの努力による第一インターナショナルの結成を契機とする国際的社会主義運動の発展に呼応して、ブルジョア的な影響を脱却した独立の労働者組織の建設が要求されたのであったが、「全ドイツ労働者協会のセクト（ラッサール主義者）が、ドイツ労働運動に支配的である限りは、ドイツの労働者階級からは、独立の歴史的行動は何物も期待しえなかったのである（SS. 85-90）。一八六六年の初頭、プロシア・オーストリア戦争の危機の深まってゆくなかで、

ビスマルクによるドイツのプロシア化とオーストリアの締め出しに反対する小市民階級の運動が全国的にわきおこり、とくに近代工業の発展したザクセンにおいては、依然として小市民的な意識にとらわれていたとはいえ、労働者がその運動の先頭に立った。三月革命の体験者、革命的民主主義者エッカルト（Ludwig Eckardt）は、ドイツの統一には二つの途がある。「ひとつは、血と鉄による権力の方法によって、侵略慾にもえる支配者による上からの統一であり、他は、下からする人民による統一である」とのべたが（SS. 95-96）、下からの統一のための国民会議が、一八六六年三月二五日および二六日、ドレスデンで開かれた。席上ベーベルは、労働者の共同闘争を宣言し、この大会に関連して、ライプツィヒ、ドレスデン、シェムニッツ、ゲールリッツなどの労働者教育協会の代表者と全ドイツ労働総同盟の指導者がつぎのような決議をしたことは重要である。すなわち、「普通選挙権、民主的な団結および集会の権利、移動の自由、営業の自由、旅行制限の廃止、学制改革の制定、国家による学校の維持、賃金問題、疲病および救済基金の規定」などである（S. 96）。

この運動は、小市民階級の不統一および無気力そしてさらにプロレタリアートにたいする猜疑によって――たとえばリープクネヒトがオーストリアによって買収されていたと考えるような――失敗に終った。ビスマルクの勝利に帰したのである。

第七章以下は、当時のドイツ労働組合運動を支配していたラッサール主義――シュワイツァによって代表される――に対して、マルクスおよびエンゲルスによって指導されたリープクネヒトとベーベルがどのように克服しようとしたか、そして一八六九年、ラッサール主義に対抗して労働者階級による革命的改党社会民主労働党を建設するまでの過程を克明に描いている。その全部にわたって紹介する余裕はないが、本書は要するに黎明期のドイツ労働運動と社会主義運動に関する注目すべき労作である。とくにリープクネヒトおよびベーベルという二人の巨人の動きを通じて、ブルジョア民主主義運動との関係を重視したことは卓見であり、苦悶しつつあったドイツ・ブルジョアジーの国民的統一への熾烈な要求との関連において革命的な労働者階級の運動の発展を把握したことは一層教訓的であろう。しかしその反面、分析的な叙述よりも記述的説明的な部分が多く、やや冗漫に流れる点も目立っている。それからいまひとつ、ラッサール主義に対する評価の問題である。その反動的・小市民的性格を指摘することは絶対に必要であるが、それと同時に、しかもそれにもかかわらず、当時、ラッサール主義が根強くドイツ労働者階級に浸透し、その容易に拭いがたい痕跡を印したのは何故か、つまりラッサール主義にたいする客観的な分析がほとんどみられなかったことは残念である。――一九五九・九・九――

（飯田　鼎）

書評及び紹介

エリザベス・アイゼンスタイン著
『最初の職業的革命家、フィリッポ・ミッシェル・ブォナロッティ――伝記的評論――』
（Elizabeth L. Eisenstein; The First Professional Revolutionist; Filippo Michele Buonarroti, a Biographical Essay, 1959.）

本書は、ハーバート大学出版部から出されている「ハーバート歴史研究叢書」（Harvard Historical Monograph）の一冊である。表題の示すようにフランス革命の渦中に生じた革命的社会主義者ノエル・バブーフ（Noel Babeuf）の協力者、後継者として、同志バブーフの死後、ウィーン会議後のヨーロッパに活躍をつづけ、メッテルニッヒの反動政治のもとに蠢動しつつあった自由主義運動――イタリアにおけるカルボナリ党の運動やドイツのブルシェンシャフトに見られる――に大きな影響をあたえたブォナロッティの生涯をとりあつかったものである。本書の論評に入る前に、フランス社会思想史には全くの門外漢にすぎない筆者が、何故にこの書をとりあげたかという個人的な理由をのべさせていただくならば、それは、このブォナロッティは、筆者のここ数年来の主たる研究対象であったチャーチスト運動のすぐれた指導者ブロンテア・オブライエン（Bronterre O'Brien）に、大きな影響をあたえたことを記憶していたからである。